

- 1 派遣期日 令和4年10月13日(木) ～ 10月14日(金)
- 2 派遣先 学校名(会場名) 群馬大学共同教育学部附属中学校
所在地 群馬県前橋市上沖町612番地
<http://jhs.edu.gunma-u.ac.jp/>

3 研修内容

(1) 視察校における研究への取組

研究主題：「生徒一人一人の学びを最大限に引き出す授業の創造」
～ICTを活用した「個別最適な学び」と「協働的な学び」の充実に向けた実践を通して～

育成を目指す生徒像：課題解決に向けて見通しをもち、自らの考えを形成し、他者との協働を通して再形成したり、自己の学びを振り返り、調整したりしながら、よりよい解決策を模索し、未来を想像する生徒

「一人一人の学びを最大限に引き出す」ためには「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させることが求められる。実際の授業を創造するに当たっては、「個別最適な学び」で得た成果を「協働的な学び」に生かし、更にその成果を「個別最適な学び」に還元するというサイクルをICTを有効に活用することで、効率的かつ効果的に実現させながら、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を推進し、「学びの質」を高めることが必要である。



- ①問題解決の過程において各教科等の特質に応じたICTの活用の仕方を検討し、効率的かつ効果的に「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実させるための実践を行う。

3. 問題解決の各過程におけるICTの活用	
問題解決の過程	ICTの活用
つかむ	- 協 テキストマイニングを活用して学習課題を設定する。 - 協 反転学習で生徒が考えたことや、共有した学習の見通しを表示する。
追究する	- 個 自分の考えや調べたことを文書作成ソフト等で入力したり、スピーチ等の発表の様子を動画で撮影したりしたものを電子ファイルに記録・保存する。 - 協 映像化したデータを教科書本文に立ち返りながら繰り返し確認し、ロイロノートのカード機能を活用して、アドバイスをしたり受けたりする。
まとめる	- 個 読みの課題に沿って映像をロイロノート上で分類し、違いや伝える効果を考える。 - 協 教員用端末に送信された生徒の単元全体の振り返りを大型提示装置等で紹介し、整理、分類したり、共有したりする。

〈各過程におけるICT活用の位置付け(国語)〉

- ②各教科等における資質・能力を育成するために「個別最適な学び」と「協働的な学び」の視点でICTをどのように活用すればよいのか検証、それを基に、ICTの活用を各過程に位置付けながら単元や題材などの内容や時間のまとまりをデザインしている。

1 単元の課題をつかみ、言語活動を共有する。

○ 単元の課題と言語活動を設定する。

- ・反転学習を行い、自宅で生徒が用意した初発の感想と疑問点を学級全体で共有し、単元の課題と言語活動を設定する。

2 学習用語を手掛かりに、映像化を通じて作品の読みを深める。

○ 「視点」を手掛かりに、物語の構造と人物像を理解する。

- ・既習の文学教材の構造と比較をする。
- ・各場面の内容をつかむ。

○ 登場人物の人物像をまとめる。

- ・主人公の行動・心情に着目し、人物像をつかむ。
- ・主人公がどのような人物なのか自分の考えをもち、班で交流しながら深める。

○ 映像化する場面を個人で検討する

ICTの活用のポイント 個 協

個 事前に教師が録音した範読や、新出漢字・語句の説明を配信することで、自宅で初発の学習に取り組むことができ、自宅で抱いた感想や疑問を学校で擦り合わせることができるようにする。

協 生徒がロイロノートで初発の考えや疑問点を入力し、AIテキストマイニングを用いて整理することで、全員で単元の課題を設定することができるようにする。

個 課題を達成するためにどのような映像にするのか検討することで、生徒一人一人が目的をもって映像化を行うことができるようにする。

〈単元における位置付け(国語)〉

(2) 公開授業・授業研究会

第2学年 国語科 「描写に着目して読み、映像化を通じてタオルが何を象徴しているのかを考え、作品の解釈を深めよう」

前時までに人物の関係性についてなど、本文中に書かれている情報を思考ツールを用いて図式化しながら整理することで作品への解釈を深めておく。そして本時は、タオルの象徴性を表している描写やそれに関連する描写に着目し、予備撮影を通じてタオルが何を象徴しているのかを考える授業であった。

個別最適な学びと協働的な学びを一体的に充実させるため、学びの蓄積(写真1)を活用し、読みの課題に迫れているか予備撮影をしながら考えたり(個)、予備撮影(写真2)をしながら他者と登場人物の言動の意味を検討し、読みの課題について考えたり(協)してICTの活用を図っていた。

とても提案性のある授業であった。映像化シートは情報整理をするのに有効であった。撮影は、自分の考えた場面を協力して行っていた。映像化のための描写の検討や撮影を経ての振り返りに、もう少し時間をかけて意見交換して深めることで、より映像化が起きたようにも感じた。



(写真1 映像化シート)



(写真2 予備撮影)

(3) 文部科学省講演

生徒の「主体的・対話的で深い学び」を実現する授業づくりを考える 文部科学省初等中等教育局 視学官 藤枝 秀樹先生

- 新学習指導要領と GIGA スクール構想との関係について
- 新学習指導要領改訂のポイント
- 「指導と評価の一体化」のための学習評価
- 各教科の指導における ICT の活用

(4) ワークショップ「使う・深める・広げる」明日から実践できる ICT

育てたい資質・能力を明確にして ICT 活用の場面について構想・協議することで、ICT 活用の質を深め、これまでの授業実践と ICT のベストミックスを模索した。また、生徒が授業に関係の無いアプリで遊んでしまう・タブレットのやりとりで生徒指導が必要になる・夜遅くまでタブレットを操作していて寝不足等、生徒に ICT をどう使わせるかも重要な課題であることが出てきた。そこで、情報モラルの授業や学習の基盤となる資質・能力としての情報活用能力の育成が必須である。授業場面や学校生活の中でどのように情報活用能力を育成していくのかを、学校として共通理解して進めていくことが大事である。

○視察校における実践例

- ・ 『情報モラル』は、タブレットの自由な活用と情報モラルの授業(パスワードの設定と管理理・グループ機能の活用・でのトラブル防止・タブレット端末の使い方・著作権)の充実を一体として行っていく。月1回、「タブレット端末活用チェックシート」を用いてタブレット端末を配布している目的や自身の使い方を振り返らせる。保護者にもサインしてもらうことで、使い方を家庭で話し合うきっかけにしていた。
- ・ 『情報活用能力』は、文部科学省の「情報活用能力の体系表例」を基に、生徒に身に付けさせたい情報活用能力をレベルごとに設定し、学年が上がって行くにつれて高いレベルの資質・能力を育んでいた。

4 感想

公開研究会に参加して、個別最適な学びと協働的な学びの充実のためにあらゆる場面で生徒が文房具のように ICT を活用している様子を見ることができた。これから、学校としての土台を整えていくと共に、まずは ICT をどんどん使っていきたいと強く感じた。今回の研修で学んだすばらしい実践を校内でも共有して、今後の指導に生かしていきたい。